



高校進学ガイダンス

多文化共生センター東京の活動から コロナ禍での外国にルーツを持つ子どもたちへの支援の継続

認定 NPO 法人 多文化共生センター東京 信川 悠希 信田 将臣 澤木 寛子

2020年3月以降の新型コロナウイルス感染症パンデミックにより、国際的な人的往来は減少し、日常生活でもさまざまな影響が生じている。外国にルーツを持つ子どもたちの学びを支援してきた当センターでは、先の見えない状況の中、手探りで支援を継続してきた。活動をもとにコロナ禍での外国にルーツを持つ子どもたちの状況や影響について報告する。

たぶんかフリースクール

たぶんかフリースクールは、主に外国の中学校を卒業して来日した学ばない生徒のために、日本語や教科を勉強する場として高校進学を支援している。都内2校で、週4日、1日5時間の授業を行い、これまで高校に進学した生徒数は700名に上る。

新型コロナウイルス感染症が広まった2020年3月は休校とし、卒業を祝う会も中止した。新年度は、公立の小中学校も休校となる中、フリースクールでは、課題を郵送して週に一回オン

ラインで顔を合わせる取り組みにした。日本語を文字から学び始める生徒が多く、郵送した課題の指示が、中々伝わらなかった。ようやく6月から授業時間を短縮し対面授業を開始した時は、学べることの嬉しさが生徒の表情に溢れていた。以降、緊急事態宣言発出時には短縮授業としながら、登校時の検温や消毒、マスクの着用、机の間隔を保つなどの感染防止対策をとり、対面での授業を続けてきた。

それに並行して、支援企業から助成を受けてオンライン授業の機材を整え、使い方の研修を行い、感染拡大のために準備を進めた。登校を控える生徒には、教室とオンラインのハイブリッド授業を実施した。オンライン授業のみに切り替わることはなかったが、2022年の2月現在は、オミクロン株の急拡大に伴い、進学先が決まった生徒にはオンライン授業を行っている。また、遠足等の行事や外部との交流は中止や縮小せざるを得なかったが、オンラインの交流など、工夫して取り組んだ。

コロナ禍の中、生徒の中には、母国

で中学校卒業後すぐに来日するつもりであったのに、7か月間も入国できなかった者や、来日後、学びの情報取得が困難で、自宅で一年を過ごしていた者もいた。

また、教育相談の中には、「来日の予定が大幅に遅れ、中学校が終わって今どこにも在籍していない」「子どもの呼び寄せが難しくなった」等の相談も増えている。この2年間、生徒数は、入国制限等により、半減している。外国にルーツを持つ子どもたちの学びが滞ることが無いように、これからも活動していきたい。

日本語を母語としない 親子のための高校進学ガイダンス

当センターは、2001年より、「日本語を母語としない親子のための多言語高校進学ガイダンス」を開催してきた。このガイダンスは、実行委員会形式で、高校の先生、NPO団体や国際交流協会等の11団体で、都内6地域で開催しており、当センターは2地域を担当

している。

コロナ禍以前のガイダンスは、当日参加型で100名近い相談者が来場し、高校の先生や支援団体のスタッフから多くの情報を得られていた。また、高校進学を体験した先輩たちから進学準備や高校生活を生で聞く貴重な機会もあった。

しかし、会場での感染拡大防止のために、従来の形式を見直す必要に迫られ、当日参加型から事前予約制の個別相談のみの形式とした。この2年間に開催したガイダンスでは、6地域の相談者の総数は、コロナ禍以前の3分の1程度となり、進学情報を求める生徒や保護者の情報取得の機会は大きく制限された。他方、より多くの人に届ける工夫として、これまで会場で配布していた進学ガイドブックをやさしい日本語、英語、中国語でわかりやすく作り直し、ウェブ上に公開した。来場者を制限せざるを得なかったが、これまでに3,000件近くのアクセスがあり、進学に関する情報を広く提供できた。

コロナ禍の2年間、会場での実施は、大きく制限されたが、ウェブ上での情報公開の拡大など、新しく取り組めたこともあった。従来の形式にこうした利点を取り込むことで、今後もより多くの人に広く情報を届けられるよう改善していきたい。

ボランティアによる 学習支援教室

ボランティアと1対1で学習する学習支援教室として、小学生とその保護者を対象とした「親子日本語クラス」と中学生以上を対象とした「子どもプロジェクト」を土曜日に行っている。親子日本語クラスではゲームをしたり七夕飾りを作ったり「みんなで勉強」する時間があり、子どもプロジェクトでは模擬面接を行う等、受験の準備もした。学習支援だけでなく、来たいときに来られ

る居場所には、多い時には1つのプログラムに30名近い学習者が集まった。ボランティアも自由参加で、当日集まった中で学習者とのマッチングをした。

しかし、コロナ禍では、自由参加の形は感染予防上の懸念点も多く、2020年の2月末から一時休止した。学校も休校となり学びの中断が心配される中、オンラインでできないかという声がボランティアからあがり、有志が集まり教室再開の方法を検討した。主な変更点は、事前予約制の導入、2つのプログラムの区分をなくすこと、オンラインの導入である。学習者・ボランティアのみならずスタッフもzoomの操作に不慣れではあったが、まずはやってみよう、7月から再開した。

試行の中で課題が見えてきた。zoomでの教材共有に大きな困惑があった。子どもたちが、学校の授業でわからなかったことや宿題を手伝ってほしい時に、ボランティアはそれを見ることができないのだ。第二に学習者情報の共有。センターには、学習者毎に学習の経過を記録したファイルがある。その日毎の組合せで学習支援をする形式では、このファイルはコミュニケーションの手がかりだ。ボランティアからは、対面では出来たことに苦慮する声が多く出てきた。それでも回数を重ねる毎に、子どもがカメラに写した教材をスクリーンショットする等々工夫をしたり、学習支援開始前に打合せを行い、担当する学習者の情報共有をしたりする時間を設けた。その他、学習者1名を複数で担当し、オンラインでの対処方法を互いに学び合うこともした。

操作に慣れるにつれて、オンラインの良さも見えてきた。移動不要の手軽さである。荒川区の隣接地域に限らず都外からも、気軽に参加できるようになったことで参加者の地域が広がった。

活動は再開できたものの、対面の教室開催は不安定である。対象年齢の限定や予約の煩雑さ等もあり、皆がオン

ラインを活用できるわけではなく、つながりが途切れてしまった参加者もいる。今後も、ボランティアの皆さんとともに工夫を重ね、より学習者のニーズに応えられる教室を運営していきたい。

今後に

不安定で流動的なコロナ禍の教育状況の中、外国にルーツを持つ子どもたちの声は届きにくく、つながりなく孤立している子どもたち、家族の方は多く、見えにくい。在留資格や経済的問題での切実な相談もある。オンラインやSNSなどによる交流の機会や学びの方法に取り組むことで、新しいつながりが見えてきた一方、寄り添いリアルで向き合う心の交流や学びの形の大切さ、深さに気づく機会でもあった。今後も子どもたち、子どもたちに繋がる多くの人たちと共に活動を進めていきたい。



オンライン授業の配信



土曜日 ボランティアによる学習支援